

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：32518

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13090

研究課題名（和文）人文学系大学院留学生のアカデミック・ライティングにおける要旨作成の実証的研究

研究課題名（英文）The Empirical Study on Humanities Graduate Students' Abstract in Academic Writing

研究代表者

三谷 彩華（MITANI, Ayaka）

江戸川大学・国際交流センター・講師

研究者番号：20831960

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、人文学分野の研究論文の要旨作成方法を提案することを目的とし、日本語教育学と日本語学の研究論文の要旨の文章構造分析、大学院生による論文要旨の作成調査、要旨の分量配分の類型別評価調査を行った。

論文要旨には、「研究目的」と「結論」という「文段」が必須で、「結論」を「中心段」とする「尾括型」の「文章型」で作成する。また、論文要旨を構成する文段の「情報伝達単位(CU)」数の多少から、4種の類型が明らかになったが、評価調査を行った結果、「背景・目的詳述型」「方法詳述型」の要旨よりも、「概要提示型」「結論詳述型」の要旨の方が高い評価が得られた。以上の結果を踏まえ、論文要旨の一案を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、人文学分野の日本語の研究論文の要旨の作成方法を、学会誌掲載の論文の分析、大学院生が作成した論文要旨と作成過程に関するインタビューの分析、論文要旨の評価調査から多角的かつ実証的に解明しようとした点にある。本研究により、論文要旨の表現特性はもちろん、大学院生の論文要旨の作成に関する実態も明らかにすることが出来た。

研究成果の概要（英文）：This study aims to propose a method for writing abstracts for research papers in the humanities. It involves: (1) an analysis of the “discourse type” of abstracts in research papers on Japanese language education and Japanese linguistics, (2) an investigation of abstract written by graduate students, and (3) an evaluation survey of different types of abstracts based on their distribution of bundan (“grammatico - semantic paragraphs”). An abstract must include bundan for both the “research purpose” and the “conclusion”, and should be structured in a final unifying type, where the conclusion as thesis paragraph. Based on the amount of “communicative units” in each bundan, there are four types of distribution. Evaluation survey revealed that abstracts in the “summary type” and “conclusion detailing type” received higher ratings than those in the “background and purpose detailing type” and “method detailing type”.

研究分野：日本語教育学

キーワード：論文要旨 文章構造 文段 アカデミック・ライティング 評価調査

1. 研究開始当初の背景

日本に留学する人文学専攻の大学生や大学院生は、専門科目のレポートや研究論文を日本語で執筆する能力が必要であり、近年では、日本語のアカデミック・ライティング教材が種々出版されている。しかし、大半の教材は、論文の本文に書く構成要素の展開や表現を提示したものが主であり、要旨についての言及が少なく、抽象的な記述が多い。また、研究論文の要旨を対象とした先行研究は、本文を構成する要素がどのように一つの要旨にまとめられるかという文章構造の分析が不十分である。

研究論文の要旨は、読者が本文の前に読む文章で、本文よりも短い文字数で筆者の意図や研究の価値を伝える重要な役割を担っている。留学生が研究論文の要旨を作成できるようになるためには、論文要旨の教材を再検討する必要がある。

2. 研究の目的

1. で述べた背景に基づき、本研究は、人文学分野の研究論文の要旨の作成方法を提案することを目的とする。研究課題は、以下の3点である。

研究課題1 日本語の人文学の研究論文の要旨の表現類型は、どのようなものがあるか

研究課題2 大学院生は、どのように要旨を作成するのか

研究課題3 大学院生と教員が考える「適切な要旨」とはどのようなものか

人文学系の大学院留学生に研究論文の要旨の作成方法を提案するためには、要旨の表現特性と大学院生の論文要旨の作成の実態を明らかにする必要がある。

研究課題1では、日本語で執筆が求められることの多い人文学分野の研究論文を対象に、論文要旨の文章構造と要旨における本文の使用傾向の分析により、論文要旨の文章構造の表現特性を明らかにする。

研究課題2では、留学生を含む大学院生に研究論文の要旨の作成を依頼し、作成過程についてインタビューを行った調査データを分析し、大学院生の要旨作成上の問題を考察する。

さらに、**研究課題3**で、大学教員と大学院生を対象に、論文要旨の評価調査を行い、読み手にとって評価の高い要旨はどのような要旨なのかを明らかにする。以上の結果をふまえて、論文要旨の作成方法を検討する。

3. 研究の方法

本研究の調査・分析は、大きく3つに分かれる。

(1) 日本語の人文学の研究論文の要旨の分析

学会誌『日本語の研究』50編、『日本語教育』50編の計100編の論文を分析対象とした。

分析は、文章論の研究における分析単位で、「内容上・形態上の相対的な一まとまりからなる機能的単位」(佐久間編著 2010:17)である「文段」と、「文段」相互の関係を示す「統括の類型」(佐久間 1989:188)、「接続関係」の類型(市川 1978:89-93)を用い、本文と要旨の「文章構造類型(文章型)」(佐久間 1999:14)を分析した。また、各文段がどのくらいの言語単位から構成されるかを、「情報伝達単位(CU)」(佐久間編著 2010)を用いて分析し、文段の分量配分による類型化を行い、表現類型とした。さらに、論文要旨の各CUが本文のどの章や節から用いられているかの使用傾向も分析した。

(2) 大学院生による論文要旨の作成調査

分析した調査データは、日本語教育学を専攻する大学院生10名(うち留学生5名)に、筆者

が指定した研究論文を読んで 400 字程度の要旨を作成してもらい(注 1) フォローアップインタビューを行ったものである。収集した要旨は、(1)と同様の方法で文章構造分析と要旨における本文の使用傾向の分析を行った。インタビューデータは文字化し、「定性的コーディング」(佐藤 2008)を援用した分析を複数名で行い、大学院生の論文要旨の作成における問題を考察した。

(3) 「適切な要旨」を明らかにするための論文要旨の評価調査

研究課題 1 で明らかになった 4 種の表現類型(「概要提示型」「背景・目的詳述型」「結論詳述型」「方法詳述型」)の研究論文の要旨計 19 編(注 2)を、35 名(大学教員 15 名、大学院生 20 名)の調査協力者に、4 段階と自由記述コメント、4 種の要旨の順位付けで評価してもらった。収集した 4 段階評価と順位付けのデータに対して統計分析を行い、さらに自由記述コメントの分析から、「適切な要旨」とは何かを考察した。

4. 研究成果

(1) 論文要旨の文章型と文段の分量配分による類型の解明

論文要旨には、「研究背景」「研究目的」「研究方法」「研究結果」「結論」「今後の課題」の文段が出現したが、「今後の課題」は、ほぼ書かれず、「研究目的」と「結論」が必須の文段である。文段相互は、「順接型」か「同列型」で接続し、後ろの「結論」が統括する「イ・尾括型」の文章型で書かれる。

また、文段を構成する「情報伝達単位(CU)」を変数に、各分野でクラスター分析を行い、日本語教育学の要旨は「概要提示型」「背景・目的詳述型」「結論詳述型」の 3 種に分類され、日本語学の要旨は、3 種に「方法詳述型」を加えた 4 種に分類されることを明らかにした。

(2) 大学院生の論文要旨の問題の指摘

論文要旨の作成調査で収集した 400 字程度の要旨とインタビューデータを分析した結果、10 名の大学院生は、要旨は何かといった点では共通の認識があるものの、論文要旨の構成要素がわからないこと、決められた字数内での構成要素の配分がわからないこと、本文のどこからどのようにまとめればいいのかわからないという要旨作成の問題があることを指摘した。

(3) 4 種の論文要旨の評価調査からみる「適切な要旨」

4 種の論文要旨を対象とした評価調査のデータに対し、統計分析を行った結果、「背景・目的詳述型」と「方法詳述型」よりも、「概要提示型」と「結論詳述型」の分量配分で書かれた論文要旨の方が有意に良い評価が得られることが明らかになった。また、自由記述コメントを分析した結果、論文要旨の構成要素や分量配分の他に、記述内容のわかりやすさや語彙、表記に関する記述も一定以上見られた。

(4) 人文学系研究論文の要旨の作成方法

(1)~(3)の分析結果から、論文要旨を作成する際には、(1)「研究目的」「結論」の文段を含め、「結論」を中心段とする「尾括型」で書くこと、(2)「概要提示型」または「結論詳述型」の分量配分で書くことが提案できる。

本研究は、論文要旨を構成する文段と、その分量配分を中心に「適切な要旨」の作成方法を検討したが、(3)では、記述内容のわかりやすさや語彙、表記に関する評価コメントも見られた。また、研究テーマや方法などの要因で分量配分の類型が決まる可能性もある。より多角的に論文要旨の分析を行い、より詳細な作成方法を提案することが今後の課題である。

注1) 調査には、上野(2013)を用いた。調査では、1200字の概要も作成してもらったが、本研究では、400字の要旨のみを分析の対象とした。

注2) 5名の論文筆者に依頼をし、それぞれ1編の論文に対し4種の要旨を作成してもらった。ただし、1編の論文は3種の要旨を作成したため、合計が19編となっている。

【参考文献】

上野美香(2013)「介護施設におけるインドネシア人候補者の日本語をめぐる諸問題 日本人介護職員の視点からの分析と課題提起」『日本語教育』156, pp.1-15.

市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版.

佐久間まゆみ(1999)「現代日本語の文章構造類型」『日本女子大学紀要 文学部』48, pp.1-28.

佐久間まゆみ編(1989)『文章構造と要約文の諸相』くろしお出版.

佐久間まゆみ編著(2010)『講義の談話の表現と理解』くろしお出版.

佐藤郁哉(2008)『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 三谷彩華	4. 巻 59
2. 論文標題 大学院生の研究論文の要旨作成における課題 日本語教育学専攻の大学院生の要旨作成調査を通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『日本語教育研究』（The Korean Journal of Japanese Education）	6. 最初と最後の頁 193～207
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.21808/KJJE.59.12	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三谷彩華	4. 巻 32
2. 論文標題 アカデミック・ライティング教育に関する日本語教育学研究の課題と展望 日本語の研究論文を対象とした研究の概観	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『江戸川大学紀要』	6. 最初と最後の頁 347-354
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50831/00001061	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 三谷彩華
2. 発表標題 日本語学と日本語教育学分野の研究論文における要旨の評価調査
3. 学会等名 第25回 専門日本語教育学会研究討論会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 李在鎬編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 328
3. 書名 『データ科学×日本語教育』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------